
改正版・赤い大巨人

ズラえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改正版・赤い大巨人

【Nコード】

N0309G

【作者名】

ズラえもん

【あらすじ】

かつて、美しい地球と人間たちの心に感動した大巨人は、地球侵略を企む異星人と命をかけて戦った・・・そして、愛する女性に人目合いたいと40年ぶりに地球に降り立った大巨人、しかしそこには変わり果てた地球の姿が・・・

（前書き）

これは、私が子供の頃夢中になっていたテレビ番組 ウルトラ・セブンのラストシーンを思い浮かべながら書き上げたもので、タイトルどおり前作（赤い巨人）の改訂版です。 前作は言葉数も少なく、マニアックな作風だったため、今回はウルトラセブンを知らない人でも共感できるようにと自分なりに修正をかけてみました。（ただし、執筆力がおぼつかないため言葉数を増やしただけです）少しでもメッセージが伝われば・・・と思っています。

1968年9月8日・・・最後の戦いを終えあいつは去って行った、まだ夜も明けきらぬ西の空を光の玉となって・・・

あいつは、瀕死の身体でゴース星人が操る改造パンドンを倒した！

それは、あいつの最後の死闘であり、そして、最後の勝利であった・・・。

そして女に残した言葉通り、あいつは最後の力を振り絞って、西の空に飛んでゆく。

西の空を見上げる仲間たちの心にあいつの声が響いた・・・

“明けの明星が輝く頃、一つの光が宇宙へ飛んで行く。それが僕なんだ・・・”

光を見送る仲間たち。

仲間の一人が独り言のように言った。

「あいつは死んで帰っていくんだろうか・・・。もしそうなら、あいつを殺したのは俺たち地球人だ・・・奴は傷ついた身体で最後の最後まで、人類のために闘ってくれたんだ！　あいつを殺したのは俺たちなんだ。　あんないいやつを・・・」

それを聞いた別の仲間が一步前に歩み出た。

「そんなバカな！ あいつが死んでたまるか・・・、あいつは生きている。 きっと生きてるんだ。 遠い宇宙から、俺たちの地球を見守ってくれるさ。 そしてまた、元気な姿で帰ってくる！」

あいつから事前に真実を知らされていた女は、あふれ出る涙を拭きうともせず、意を決したように力強くうなずいた。

そして、光が飛んでいった西の空を見上げた女は、まるで自分に言い聞かせるように心の中でつぶやいたのだった。

“いつかまた会える日が、きっと来る・・・・・・・・・・さようなら・・・・・・・・”

あいつが去って40年の歳月が流れた。

”地球は我々人類自らの手で守らなければならないんだ！”

あの日のキリヤマの言葉と、身を呈して戦った彼の勇姿が人々に勇気を与え、地球には安息の日々が与えられた。

そして、訪れた平和とともに人類の科学は目まぐるしく進化を遂げていき、街は近代化が進み、人々は昼も夜もなく浮かれ騒いだ。

やがて人々は、侵略者に怯え続けた日々を忘れたかのように更なる

快樂を求め始め、世の中は全て競争化社会へと打って代わり、強い者が弱い者を虐げる。

誰もが見解の相違や国籍の違いから争い始め、勝者は高々に笑い敗者は血の涙を流す。

こうして勝ち上がった者達は、権力と財力を振りかざし、開発と言う名のもとに限りある資源さえをも乱用して行った！

そして今、大地は悲鳴をあげ始める・・・人々の心からはゆとりが無くなり、落ち窪んだその目にゆがんだ思想を映し出し、互いを探りあい傷つけあった。

大気は汚れ、瞬く星さえも覆い隠し、目障りなネオンサインだけが夜を支配していた。

女は病院のベッドに横たわり、ゆっくりと滴り落ちる点滴のしずくを見つめていた。

年齢はすでに60歳を越えているだろうか、その虚ろな表情はまるで蠟人形のように白く、左の腕には度重なる点滴の痕が薄紫色に変色し痛々しく浮き上がっている。

気を緩めれば下がってくる瞼・・・一度閉じてしまえば二度と開かない気がして、女はベッドの上に身を起こした。

”ハァーッ” とため息をつき、視線を向けたサイドテーブルには、若き日の自分がある人と仲良く肩を並べ、楽しそうに笑いあっている写真が置かれている。

写真を見つめ、女はそつとつぶやいた。

「会いたい・・・もう一度・・・あのひとに会いたい・・・」

青白い顔で、きつく唇を結んだ女の目から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

そして・・・あいつは、ある日突然やって来た。

大地を揺るがし眩い光と共に地球に降り立った赤い姿の巨人は、目の前にそびえ立つ高層ビルを、まるで駄々っ子が積み上げた積み木の城を破壊するかのように、手当たり次第になぎ倒していく。

“デュワッ!” 巨人の雄叫びとともに振り下ろされるその太い腕により、ビルは大音響とともに崩れ去り、もうもうと立ち込める土煙は太陽の光さえも遮った。

暴れ狂う巨人の額から繰り出される怪光線によりダムが決壊し、溢れ出た水が怒涛のごとく街に押し寄せはじめ人々は悲鳴を上げる。

他人を押しつけ我先にと逃げ惑う人々を尻目に、巨人の破壊は果

てしなく続いた。

“デュワッ！” 巨人が高速道路を踏み潰すと、張り巡らされていた高圧線が激しい音をたて火花を散らし、まるで連鎖の様に街中でガス爆発が起こり、至るところから吹き上がる炎に包まれ、街は瞬く間に瓦礫の山となっていたのである。

そんな中、暴れる巨人に向かって駆けてゆく一人の女の姿があった！

ヨロヨロともつれる足を必死に操り駆け続ける女は、時折激しく咳き込むと、苦悶の表情を浮かべその場にしゃがみ込んだ。

ハアハアと肩で息をするたび、女の口元に当てたハンカチが細い指先と共に小刻みに震えている。

油断すれば遠のきそうな意識を、女の気力だけがつなぎとめていた。

巨人人はひとしきり暴れると海に向かって歩き始めた。

砂浜に立ち水平線の彼方に目を向ける。

そんな巨人の後ろ姿は、心無しか哀しげに見えた。

ふらつく足を引きずるように、女は海に見える岬へとたどり着いた。松ノ木にもたれかかり、苦しそうに肩を揺らす、そんな女の姿に氣付いた巨人がゆっくりと近づいて来た。

女は息を整えると巨人を見上げ、瞳を潤ませながら言った。

「やっと・・・やっと会えたのね！ 私はこの日が来るのをずっと待っていました。それなのに何故あなたは暴れているの？」

巨人は女の顔を見つめながら、まるで天から降注ぐような声で言った！

「私も君に会うためにやって来た。だか君たち地球人は私の事など忘れてしまっている！」

巨人の予期せぬ言葉に、女は思わず息を飲んだ。

「なっ　なぜ？　どうしてそんな・・・私は・・・私はあなたの事を忘れたりしない！　あなたが私の前からいなくなったあの日から、私は1日たりともあなたの事を忘れたことなどなかったわ！」

私はあなたに会いたくて、きっと会えると信じて毎日この海岸に来ていたのよ。　あの日あなたが私の前からいなくなったこの海岸に！！」

訴える様に言う女に、巨人は左右に首をふると、海岸に打ち寄せられた大量のゴミを海水とともに右手ですくいあげ、”見ろ！”と言わんばかりに女の顔の前につき出した！

「わすれていない？　ではこれは一体どういう事なんだ！」

大巨人の怒りの理由を察した女は、ごみの山から視線をそらせ、悔しそうに唇を噛み締めた。

“デュワッ！”　大巨人がゴミの山を岩礁に向かって投げつけると、ゴミに混じっていた無数のペットボトルが砕けちり、大きな音をたてた。

大巨人は女を見下ろしながら言った。

「私は君に会いたかった。そして第2の故郷であるこの地球が懐かしかった。だから私は恒点観測員340号としての任務を終えるのを待ち、こうしてはるばるやって来たのだ！　だが、地球に降り立った私は我が目を疑った・・・とても信じられなかった！　これがあの地球なのか？　これが私の愛した美しい星なのか？　あれほど美しかった地球が、なぜこれほどまでに薄汚れた星に変わってしまったんだ？　濾過しなければ飲めない水に、騒音を撒き散らす高速道路。工場からは黒煙が絶え間なく立ち上り、視界を遮るほどに漂っている！　魚が住めないほど汚染された川、君たち地球人の私利私欲による森林伐採やダム建設・・・繰り返される無意味な戦争に核実験。君たち人類の傍若無人な振る舞いで、今や他の動物達の生態系もが異常を来し始めているではないか。私はこんな物を守るために命を賭けて戦ったのか？　こんなもののために生死をさまよったのか？　私が愛した美しい地球は・・・他人を思いやる地球人の優しい心は一体何処へ行ってしまったんだ？」

大巨人の声は悲しみと怒りに震えていた！

嘆き悲しむ大巨人の前に女はガックリと膝まづいた。

「ごめんなさい・・・確かに・・・確かにあなたの言う通りだわ！

今地球では、たくさん環境問題を抱えています・・・それは全て人間達のエゴが招いたもの。でも、その問題に真剣に取り組んでいるのはごく一部の人間だけ、大半の人は他人事のように遠くから眺めるだけです！ 核実験にしてもそう。いつだったか、あなたは兵器の開発に躍起になっていた科学者たちを見て言ったわね。新しい兵器を作れば相手もまたそれ以上のものを作る、そんなものは“血を吐きながらつづける悲しいマラソン”だと・・・！ おろかな地球人は未だにそのことに気付いていないんです！ いえ、気付いていないんじゃない、たえ気付いていてもやめようとはしないんです。相次ぐ核実験に無意味な殺し合い。やれエコだリサイクルだと口では騒ぐものの、誰もが損得勘定でしかその重い腰をあげようとはしない！ 40年前、あなたが命懸けで教えてくれた、もっとも大切な物を、今の地球人は忘れてしまっているのよ・・・！」

女の目から一筋の涙が頬を伝った。

悲しげに肩を落とし巨人は言った。

「かつて私は、この地球を侵略しようとやって来る異星人と命を懸けて戦った！ 美しい地球を守るため、身も心もボロボロになるまで・・・しかし、私は大きな間違いを犯していたようだ。地球の本当の敵は・・・私が地球を守るために、本当に闘わねばならなかったのは、異星人ではなく君たち地球人だったんだ！！」

こぶしを握り締め、泣き崩れる女を見下ろす巨人は、自らの腹部の前で両腕をクロスすると気声を発した。

“デュワッ!” そのとたん巨人の目が青く輝いた。それはまるで女の心を見透かすかのようであった。

しばらく女を見つめていた巨人が再び口を開いた。

「君とは、笑って再会したかった……それがこんな形になろうとは! でも、会えて良かった……地球は変わってしまったも、君は姿も心もあのときのままだ! 私はもう2度と地球に来ることはないだろう……。」

そう言い残し、巨人が飛び立とうとした時、女がそれを制した!

「待って……ちょっと待って……あなたは今私に会えて良かったと言った。 でもこの地球は、きつとこの先人間のエゴのために崩壊するでしょう! だから、だから私はあなたについて行きたいの!

あなたの愛した地球が滅び行く姿を、私は……私は見たく無いから……。」

そう言って巨人を見つめる女の目は、40年前の若き日の色そのままに美しい光を放っていた。

巨人は女の意味が固いことを確認すると、その身体を両手でそっと包み込み、そのまま宇宙の彼方へと飛び立っていったのであった!

いつもと変わらぬ平和な町に、いつもと変わらぬ夜が訪れようとしていた。

そして翌日・・・まだ夜も明け切らぬ岬の上、2人の男が横たわる女を見つめていた。

年長と見られる男が言った。

「フルハシ君、人生とは実に皮肉なものだね・・・公害病を食い止めようと必死で戦っていた彼女自身が公害病で命をおとすとは・・・」

「ええ・・・やり切れませんよまったく。でも、キリヤマさん！彼女のこの幸せそうな顔を見てください、長い間気管支喘息で苦しんでたとは思えないくらい晴れやかに・・・まるで私には彼女が笑ってるように見えますよ。」

「うん！確かに・・・こんな幸せそうな顔の彼女は久しぶりに見た気がする・・・きつと彼女は“あいつ”に会えたんだ。ずっと会いたがってた“あいつ”に！！」

2人はうなずきながら顔を見合わせると、そつと女の手を握った。

眠るように穏やかな表情の彼女を見つめていた2人が、ふと西の空を見上げたとき・・・

そこにはまるで、横たわる彼女をやさしく見守るかのように、明けの明星がひとときわ明るく輝いていた。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0309g/>

改正版・赤い大巨人

2011年10月1日16時17分発行